熊取町埋蔵文化財調査報告第35集

七山東遺跡発掘調査概要報告書・Ⅰ

平成12年　3月

熊 取 町 教 育 委 員 会

はしがき

考古学や埋蔵文化財という言葉がとても親しみやすいものになってきたと思います。毎日のように全国各地の発掘調査が新聞等で報道されるなか、考古学上の定説さえ覆されるような驚くべき発見もありました。

そんな昨今私達の周辺では、住宅開発や道路の整備が着々と進んで景観が大きく様変わりしています。市民生活はとても便利で豊かなものになりましたが、そんな繁栄とひきかえに貴重な遺跡が次々と失われていることは案外私達の意識に薄いことと思います。

熊取町教育委員会は皆様の御協力と御理解を得ながら毎年50件程の緊急発掘調査を実施しています。

本書は分譲住宅地開発工事に伴う緊急発掘調査として平成11年度に実施した発掘調査の概要報告書として作成したものです。七山で本格的な発掘調査が行われた初例ということもあり、今回の調査成果が熊取町の歴史研究に新たな視点を切開くことを願っています。

最後になりましたが、現地での発掘調査にあたって多大な御協力をいただきました株式会社谷口開発様ならびに関係者各位に対しましてここで厚くお礼申し上げます。

平成12年３月

熊取町教育委員会
教育長　甲田　太三郎

例　　言

1．本書は株式会社谷口開発による分譲住宅地造成工事に伴って、平成11年度に熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係が実施した熊取町七山の七山東遺跡における発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川　淳を担当者とした。
まず平成11年7月5日に試掘調査を実施したところ、多数の埋蔵文化財を確認したので、株式会社谷口開発と協議をしたところ、埋没保存ができるような計画変更ができないため、引き続いて本調査を実施し遺跡を記録保存することに決定した。本調査は平成11年7月14日から同7月27日までの間現地で発掘調査を実施した。平成11年度中はその成果を整理し概要報告書を作成する内業を行ない、本書の発刊もって終了した。

3．本書における図面の標高は、T．P．（東京湾平均潮位）を用いた。また方位は、地図以外については磁北を示すこととした。

4．本書における図面の上色は、『新版標準土色帖』第10版（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。

5．本書の作成に当たっては冨田博之氏、中岡勝氏（泉佐野市教育委員会考古学技師）、内本勝彦氏（堺市教育委員会考古学技師）に有益な御教示を得た。

6．本書の作成及び発掘現場での作業にあたって、下記の調査員・調査補助員の参加を得た。
石松　直、尾上智史、小野美雪、関井澄子、山本恵子

7．発掘調査現場で作業にあたった作業員と使用した機械類は、株式会社谷口開発から提供を受けた。

8．本書の執筆は前川淳が行った。

目　　次

第１章　熊取町の地理的・歴史的環境……1

第１節　地理的環境……1

第２節　歴史的環境……1

第２章　調査に至る経緯……5

第１節　七山東遺跡の地理的環境……5

第２節　七山東遺跡周辺の調査……6

第３節　調査の契機……6

第３章　調査の概要……7

第１節　基本層序……7

第２節　遺構……10

第３節　遺物……11

第４章　まとめ……21

第１章　熊取町の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

第1図　熊取町の位置

熊取町は大阪府泉南地域の中央に位置し、貝塚市・泉佐野市の両市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉状を呈している。町域の総面積は約17.19㎢を有する。地形による面積比を見ると、山地41%、丘陵24、段丘23%、低地12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約３分の２を占めている。地域別に見ると、町南部においては泉南和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。

町域に水源を持つ河川は見出川・雨山川・住吉川の３水系が存在している。３河川とも町南部の山間部を水源としており南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を経て大阪湾に注ぎ込んでいる。いずれの河川も下流部が他市域を流れていることに加えて、本町が瀬戸内式気候区の東端に位置しているために年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの潅漑用の溜め池を目にすることが出来る。

第２節　歴史的環境

町内の遺跡は現在41箇所を数える。

縄文時代の明確な遺跡は発見されていないが、東円寺跡の所在する熊取町野田の町立中央小学校で縄文時代早期の有舌尖頭器と石鏃が検出されているので、東円寺跡は現在縄文時代からの複合遺跡としている。

弥生時代の遺跡もまた発見されていない。JR熊取駅のある大久保における駅前整備事業に伴う平成元年の発掘調査では畿内第Ⅴ様式の形式を示す土器が大量に検出され大久保E遺跡となったが、その土器は古墳時代初期の所産と考えられている。

古墳時代を示す遺跡について、町中央部の山の手台住宅には五門古墳と五門北古墳の２つの古墳が記されているが、これは開発によって既に消滅している。しかし開発では副葬品や古墳の石材等が発見されたということもなく、これらが古墳であった可能性はほとんどない。

飛鳥時代については、平成10年度の久保城跡98－１区の調査で３本の溝とその中から土師器と須恵器が検出され、比較検討の結果飛鳥時代の所産であると推定されるようになった。

奈良時代については、これまで東円寺跡87－１区の調査で建物４棟と土壙、須恵器、土師器が検出されたのみに止まっていたが、平成11年７月熊取町七山で西暦750年以降の奈良時代を示す多数の須恵器片が宅地開発に伴う事前発掘調査で検出され、熊取町第41番目の遺跡である七山東遺跡となったが、このことについては本書に示す通りである。

平安時代については、熊取町野田の熊取町役場付近に想定されている東円寺の創建が、発掘調査で発見された軒瓦の比較考察から平安時代とされている。また平成８年度には熊取町大久保から紺屋にかけての私立病院の建設工事の事前調査で黒色土器や須恵器、土師器が自然流路内から検出されている。

鎌倉時代以降中世に関しては、熊取町内の遺跡のほとんどが同時代を中心とした様相を示しているので紙面の都合上詳細にできないが、野田の東円寺跡、久保の久保城跡、大浦の大浦遺跡、紺屋の紺屋遺跡、七山の七山東遺跡では瓦器を豊富に含む包含層が存在しており、建物・溝といった遺構も検出される。

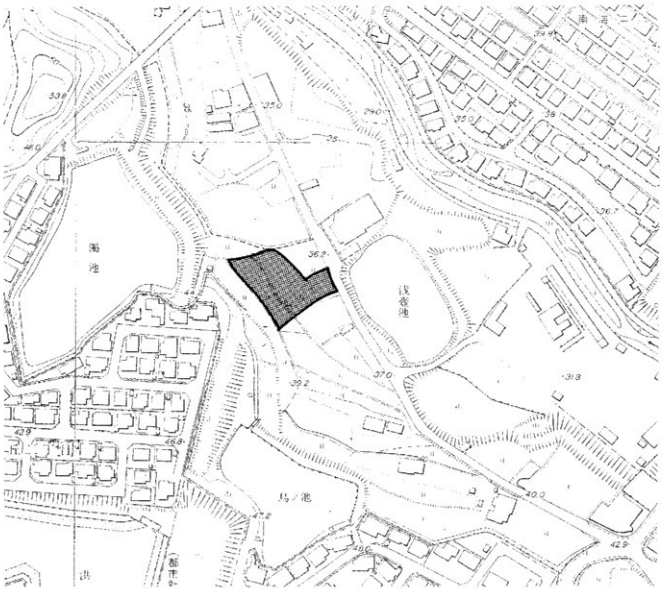
また近世以降の遺跡としては五門の中家住宅、同中家住宅周辺遺跡、大久保の降井家屋敷跡などがあり、同次代に繁栄した大庄屋の生活ぶりを物語るような陶磁器片や土師器の大甕、多数の瓦片、埋桶遺構、溝（堀？）などが検出されている。

熊取町遺跡分布図

周知の遺跡一覧表

No.	周知の遺跡名	種類	時代	地目	立地	主な成果等
1	降井家書院	建造物	室町～江戸	宅地	平地	国指定重要文化財
2	中家住宅	建造物	室町～江戸	宅地	平地	江戸期から明治期頃の陶磁器等出土
3	来迎寺本堂	寺院	鎌倉	宅地	丘陵腹	15～16世紀の土師器を検出
4	池ノ谷遺跡	散布地	旧石器	水田	平地	
5	甲田家住宅	建造物	江戸	宅地	平地	
6	東門寺跡	寺院跡	弥生～江戸	宅地	平地	縄文・奈良・鎌倉～室町・江戸の複合遺跡
7	城ノ下遺跡	城郭跡	室町	宅地	丘陵	
8	成合寺遺跡	墓地	室町	畑地	丘陵腹	14世紀代の600基以上の土壙墓群等検出
9	高蔵寺城跡	城郭跡	室町	山林	山頂	土塁・堀切等の構築物を確認している
10	雨山遺跡	城郭跡	鎌倉	山林	山頂	月見ノ亭・馬場・千畳敷の地名が残る
11	五門遺跡	散布地	古墳～江戸	宅地	丘陵	須恵器等を採取するも現在消滅
12	五門北古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	古墳参考地、現在消滅
13	五門古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	古墳参考地、現在消滅
14	大浦中世墓地	墓地	室町	墓地	平地	享徳4年銘（1445）の五輪塔の地輪出土
15	久保城跡	城郭跡	鎌倉	水田	平地	的場・矢の倉等の字名、瓦器片多数出土
16	山ノ下城跡	城郭跡	鎌倉	宅地	平地	
17	大谷池遺跡	散布地	古墳～江戸	池	平地	
18	祭礼御旅所跡	祭礼跡	室町	山林	丘陵	五門・紺屋共同墓地
19	正法寺跡	寺院跡	鎌倉	宅地	丘陵	
20	小垣内遺跡	寺院跡	江戸	道路	丘陵	毘沙門堂跡、現在消滅
21	金剛法寺跡	寺院跡	室町	宅地	平地	大森神社神宮寺、現在消滅
22	鳥羽殿城跡	城郭跡	室町	山林	丘陵	
23	墓ノ谷遺跡	寺院跡	室町	山林	丘陵腹	
24	花成寺跡	寺院跡	室町	山林	丘陵	
25	降井家屋敷跡	屋敷跡	室町～江戸	宅地	平地	敷地を区画する溝や江戸初期の陶磁器等
26	大久保A遺跡	散布地	江戸	宅地	平地	
27	下高田遺跡	条里跡	鎌倉	田	平地	
28	大久保B遺跡	集落跡	弥生～江戸	宅地	平地	弥生末～古墳初中心の遺物出土
29	紺屋遺跡	散布地	古墳～江戸	宅地	平地	奈良～平安期の河川跡検出
30	白地谷遺跡	散布地	室町～江戸	田	谷	
31	大久保C遺跡	散布地	室町～江戸	宅地	平地	
32	千石堀遺跡	城郭跡	室町	山林	丘陵	天正年間（1573～92）の雑賀衆徒の城跡
33	口無池遺跡	散布地	平安～江戸	宅地	平地	平安末～鎌倉初の遺構・遺物検出
34	大久保D遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地	
35	大浦遺跡	散布地	鎌倉～江戸	田	平地	13～14世紀の瓦器等出土
36	久保A遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地	
37	大久保E遺跡	集落跡	弥生～江戸	宅地	平地	弥生末～古墳初の遺物多数出土
38	久保B遺跡	集落跡	鎌倉～江戸	宅地	平地	13～14世紀の瓦器等出土
39	中家住宅周辺遺跡	集落跡	室町～江戸	宅地	平地	江戸期以降の陶磁器等多数出土
40	朝代北遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地	鎌倉時代以降の遺物の包含層
41	七山東遺跡	散布地	古墳～室町	宅地	平地	奈良時代の須恵器を多量に含む包含層

第２章　調査に至る経緯



第１節　七山東遺跡の地理的環境

今回の調査地点は見出川の左岸の低丘陵裾部および狭い平坦地を利用した小規模な水田地帯である。今回の調査では河川に関連すると考えられるような砂礫の混じった堆積層などは一切観察されておらず、安定した黄褐色粘質土層が広範囲に広がっている。従って開発に適しているためか、はやくも奈良時代頃から開発が始まったものと考えられる。

また見出川は熊取町内では非常に低く谷状に流れる川で、現在の川面のレベルと、調査地点の測量用仮ベンチマークを設定した町道面の比高差は10数mある。

また今回の分譲住宅の開発と同様の住宅が調査地点の周囲に散在しており、調査地点一帯は今後住宅街へと変貌していくだろう。

地理的に七山は貝塚市に接しており、貝塚市との境界付近には千石堀城跡などの中世の遺跡が存在するため、現在の七山の集落を中心に中世以降の村落や山城などの遺構が発見される可能性が考えられたが意外にも須恵器を中心とする多くの古代の遺物の出土をみたわけである。

第２節　七山東遺跡周辺の調査

熊取町七山では開発工事に伴って度々試掘調査が実施されているが、これまで周知の遺跡がなかった。

また今回の調査地点の北方、貝塚市の熊取町に接する付近には、中世の山城（千石堀城）があったとされる低丘陵がある他は、概ね遺跡は知られていない。

第３節　調査の契機

平成11年３月31日、熊取町七山東570-3他６筆において、株式会社谷口開発が宅地造成工事（開発面積1192.14㎡）を計画していることが、開発の事前協議の合議書類で確認された。

開発地点はは周知の埋蔵文化財包蔵地外ではあるものの、申請面積が500㎡を超えることから、埋蔵文化財の試掘調査を実施する必要があると考えられ、その旨を指導し理解と協力を求めた。

平成11年６月24日に教育委員会生涯学習推進課に埋蔵文化財試掘調査の依頼書が提出され、平成11年７月８日に試掘調査を実施した際、８世紀頃の須恵器を中心とした埋蔵文化財が多数発見されたため、文化財保護法第57条の５第1項に基づく埋蔵文化財発見届出を文化庁に提出し、新たに七山東遺跡とした。

試掘調査ではGL下－30cmより中世の包含層が、さらに－60cmより古代の包含層が存在することが判明した。

住宅地造成の切盛り計画を詳細に検討した上で、分譲住宅の基礎工事計画では包含層が直接的に破壊されないことなどから、宅地部分についてはそのまま埋没保存とし、埋蔵文化財の破壊の免れない進入路部分のみを本調査することとした。

なお今後予定される住宅建設時の浄化槽と配管部分については別途発掘を実施するという方法をとることとした。

試掘調査では進入道路となる部分の埋蔵文化財が破壊を免れないことが判明したため、本格的発掘調査をして、その記録保存を実施することとなった。

平成11年７月18日から同25日の実働約６日間本調査を実施し、様々の資料を得て現地での調査を終了した。

平成11年11月１日より、採集した埋蔵文化財遺物および記録資料の内業調査を実施し、同12年２月末日をもって全ての内業作業を終了した。なお平成12年３月31日本書の刊行をもって調査は総て終了とする。

第３章　調査の概要

第１節　基本層序

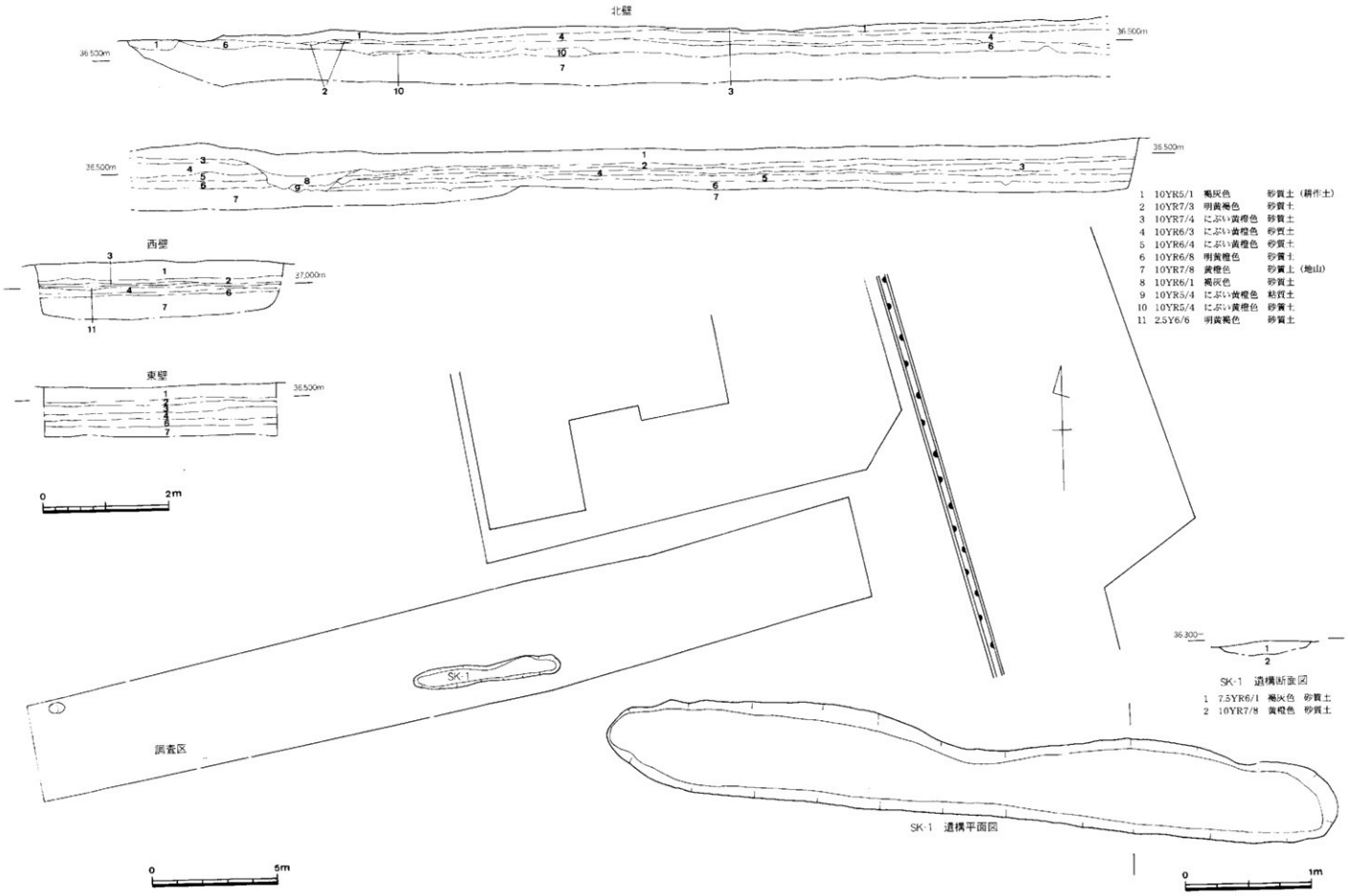
基本的な層序を上から順に示す。

主　な　層	層厚	GLからの深さ	備　　考
①旧耕作土	20cm	−0〜−20cm	現代の耕作土（水田）
②耕作土床土	10cm	−20〜−30cm	調査地点はついこの前まで水田だったが、その床土
③中世包含層	10cm	−30〜−40cm	一見近世的な黄色味を帯びているが、それは上層の水田耕作による染み込みのせいであろう。 ④⑤とは一見して区別がつく。瓦器以降の時代の遺物を含まないようである。
④中世包含層	10cm	−40〜−50cm	⑤と見分けるのが困難だが、場所によって微妙に異なるような感じがあるので一応分層した。
⑤中世包含層	10cm	−50〜−60cm	須恵器破片等古代の遺物も多い。
⑥古代包含層	15cm	−60〜−75cm	一見⑦地山に極似する黄下褐色系粘質土だが、ほぼ奈良時代に限定される遺物のみを豊かに含んでいる。
⑦地　　山		−75cm 以下	黄色粘質土で調査検出面とした。念のためさらに掘削したが、古代以前の層は検出しなかった。

土層の観察

調査区最北部の最も深い場所で、地表から検出面の地山①までの深さは約75cm、古代の包含層⑥の上面まで約60cm、中世包含層③の上面までは約30cmである。調査区内の壁面で観察する限り、南の丘陵方向へ行くに従って、旧水田は段を成して高くなるが、元来の地山⑦が高くなる場所（調査区の北端から約32m南の地点）で古代の包含層⑥は途切れている。従って丘陵裾部に程近い調査区南側は古代包含層はなくなり、中世包含層は極端に薄くなって③と④のみ分布する。南側では地表面から約45cm下で地山面が存在することになる。

また古代の包含層⑥であるが、観察では地山⑦と極めてよく似ているため、これは地山面を耕した結果形成された層であることが考えられる。またその上層の中世包含層⑤は、下層⑥を耕しているため、灰色の中世包含層ながらも、古代層⑥の黄味を含んでいると見ることができる。このようにこの調査区内では、上層が下から上に漸移していっていることがわかる。



1	10YR5/1	褐灰色	砂質土（耕作土）
2	10YR7/3	明黄褐色	砂質土
3	10YR7/4	にぶい黄橙色	砂質土
4	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂質土
5	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂質土
6	10YR6/8	明黄橙色	砂質土
7	10YR7/8	黄橙色	砂質土（地山）
8	10YR6/1	褐灰色	砂質土
9	10YR5/4	にぶい黄橙色	粘質土
10	10YR5/4	にぶい黄橙色	砂質土
11	2.5Y6/6	明黄褐色	砂質土

第２節 遺構

中世包含層下に遺構は見られず、古代包含層⑥を除去した地山⑦直上を遺構検出面とした。

調査区全域にわたって、目立った遺構は検出されていない。

土壙SK１

調査区全域における唯一の遺構である。調査区の中央北寄りに明らかに人為的に掘削されたと考えられる溝状の遺構で、長辺５ｍ×短辺70cm、検出面からの深さ平均約10cmのほぼ長方形である。

遺物は埋土より須恵器蓋の破片１を検出したにとどまる。

僅かに残された埋土は砂や黒灰色土ではなく、地山⑦に近い黄橙色の粘質土であったが、これは地山直上の古代包含層⑥とほぼ同質とみられる。

調査時は人為的な溝の底部の痕跡かと考えていたが、詳細に観察したところで、検出長よりも長かった形跡は全くなかった。

他市町村の調査報告書などから類例を検索した結果、木棺などを直葬した墓の痕跡によく似ている感がある。勿論副葬品らしき遺物や、木棺に関係する木材などは一切検出されなかったが、その平面形態や大きさから、若干の可能性を指摘しておく。

その他の遺構

調査区の南側は北側に比べて、２段高くなっている。この部分に建物などの遺構が発見できないかと執拗に調査区を広げたが、今回の範囲では一切見つかっていない。

第3節 遺物

① 残存状況から判断して実測可能な遺物を総て実測図にした。(実測点数80点)

② ①の実測図と対照できるように写真を撮影し掲載した。

総破片数	1045点		
須恵器破片点数	293点	総破片数に対して	27%
土師器破片点数	572点		54%
瓦器破片点数	182点		17%

須恵器（点数は破片の数）

甕40点　高杯3点　甑2点　蓋杯の杯8点

蓋杯の蓋31点　椀・鉢・皿類16点　壺10点（広口壺3点・長頸壺4点・ほか）

器種不明159点

古代土師器

甕12点　製塩土器45点　皿17点　蓋5点

椀・鉢・皿類15点　器種不明270点

瓦器

椀75点　皿4点　羽釜1点　器種不明43点

中世土師器

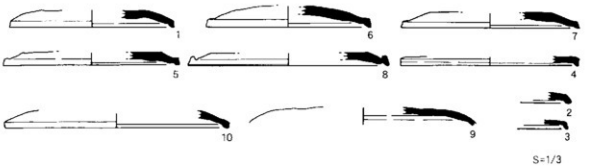
椀7点　皿1点　器種不明185点

③土師器が全体の50%を超えているが、須恵器が約30%を占め、須恵器の比率の高さはこれまでの熊取町内の発掘調査では類例がない。

④今回の調査で古代の包含層から検出された須恵器は、他地域の須恵器との比較から、第Ⅳ期-2段階つまり平城宮Ⅲ（8世紀第3四半期）から第Ⅳ期-3段階平城宮Ⅳ（8世紀第4四半期）のものと考えられる。同時に出土した土師器も同時期のものと考えられる。

⑤また土師器の中では製塩土器と考えられるものが多く含まれている。

須恵器蓋について



今回出土した七山東遺跡の須恵器蓋の法量（直径）

	法量（cm）	実測図番号	蓋 の 特 徴
①	13.0±数mm	1・6	上面が丸く、見た目に小ぶり。
②	14.0±数mm	5・7	上面が平滑で、外面端部に段差があるものと、外面がやや丸いものの2種類がる。
③	16.0±数mm	8	外面端部が完全にくびれ沈線状、全体が偏平。
④	19.0±数mm	2・3	非常に偏平で、器壁が薄い

蓋の復元口径は概測の数値で、本来は数mmの±があるであろう。

今回出土した須恵器蓋の復元口径は一応４通りになった。後述するが、蓋に見合う筒の須恵器杯の口径と高台は３通りである。しかしこのうち④はかなりの大型の蓋で、このサイズに見合う杯体部は今回は出土していないようである。あるいはこの④のような大型の蓋は杯ではなく、他の器種に付随した可能性もある。とすると今回の七山東遺跡の須恵器杯の法量は各表①～③の３通り（もしくは４通り）の可能性が高い。

1　須恵器　蓋　復元口径13.0cm

偏平で大型の８よりは小さく、また全体的に丸みがあり、体部には段差がないのが大きな特徴。

2　須恵器　蓋　口縁

直径19cm程度の蓋の口縁端部である。形状からして奈良時代中期から後期のものであろう。

3　須恵器　蓋

２同様で、直径19cm程度と考えられる。

4　須恵器　蓋

想定口径18～19cm。

5　須恵器　蓋　口径14.0cm

つまみ部分が欠損する口縁部分のみであるが、よく特徴を残している。上面は平滑にヘラケズリされている。また端部にかけて鋭角に落ちている。同様の特徴を残しているものは他には検出されていないが、６、７と８の様式の中間を示すものか。

6　須恵器　蓋　口径13.0cm

つまみ部分は欠損しているが、よく特徴をとどめている。外面端部にかけては、段はないが、緩やかに下りており、内面も呼応してカーブする。器壁は割合と厚手。

7　須恵器　蓋　口径14.0cm

口径は約14.0cmを測り、5とほぼ同じ法量だが、こちらは上面が滑らかでやや丸味を帯びている。端部は黒く変色しており、或いは重ね焼をした痕跡かもしれない。

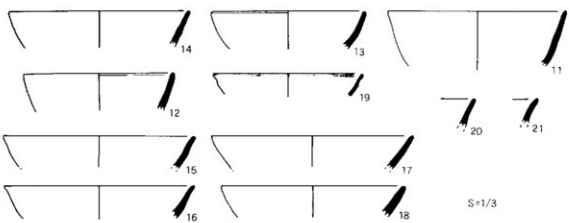
8　須恵器　蓋　復元口径16.0cm

偏平で口縁上面に沈線が巡り、端部が下向きにくびれる形状で、奈良時代中期から後期にかけての特徴を示す蓋。今回の調査区の年代を知る上でも重要な出土遺物。

9　須恵器　蓋　体部

推定最大径は20cmを超えるものと考えられるため、蓋でない可能性も大きい。また全体に歪が生じている。

須恵器　杯　口縁部および体部



今回出土した七山東遺跡の須恵器杯の法量（口径）

	法量（cm）	実測図番号	杯の特徴
①	11.6～12.0	12・13	陶色の杯Hタイプ。高台なし。口縁内湾。
②	14.2	11・14	陶色の杯Fタイプ。
③	15.0	15・16	陶色の杯Dタイプ。非常に薄手。口縁端部外反
④	16.0	17	
⑤	14.5	18	厚手で口縁立上がりは緩やか。

須恵器杯の口縁部および体部破片における推定口径は、上表のようにおよそ3通りになった。

11　須恵器　杯　口縁および体部　口径14.2cm

高台部は欠損。高台以外で高さ4.0cm以上を測る大型品で、体部外面のくびれが小さく、むしろやや内湾気味に立ち上がる。奈良時代の代表的な杯であろう。

12　須恵器　坏　口縁部および体部　口径11.6cm

器壁が厚く、立上がりが垂直に近い角度が特徴。

13　須恵器　杯　口縁部および体部　口径12.0cm

底部が欠損している。

14　須恵器　坏　口縁部および体部 口径14.2cm

底部が欠損しているため、詳細は不明。器壁は薄めで、立上がりが急である。奈良時代の杯。

15　須恵器　椀・鉢・皿類（坏）　復元口径15.0cm

断面形状、焼成状況では瓦器と見紛うほどであるが、内外とも横方向の強いナデが明瞭に観察される。

16　須恵器　椀・鉢・皿類　口縁および体部　口径15.0cm

器壁薄く、一見瓦器椀と見間違いそうになる。口縁端部内外面が黒く変色しており、或いは重ね焼の痕跡か。

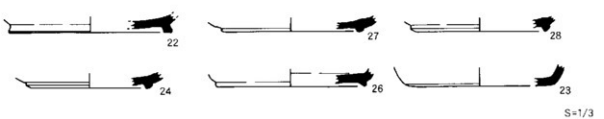
17　須恵器　椀・鉢・皿類　口縁および体部　口径16.0cm

18　須恵器　椀・鉢・皿類（坏）　口径14.5cm

椀とも坏ともいえるような器形を呈している。器壁が非常に厚手。口縁部外面は黒く、口縁より1.2cm以下は灰色を呈し、焼成にはっきりとした差が現れている。一見重ね焼をした痕跡かとも思えるが、もっと充分な考察が必要であろう。

須恵器　杯　底部（高台部）

今回出土した七山東遺跡の須恵器杯の高台径



今回出土した須恵器の杯の高台の直径は、下表のようにおよそ３通りにまとまる。

	法量（cm）	実測図番号
①	10.0～10.3	28・24
②	11.4～11.5	27・26
③	12.8	22

22　須恵器　坏　底部　高台径13.0cm

高台部のみの残存。

23　須恵器　坏　底部　底部径10.4cm

高台がないタイプのようで、外面よりも内面の方が焼成が良好なところから、正位置で焼かれたものと考えられる。

24　須恵器　坏　底部　高台径10.0cm。

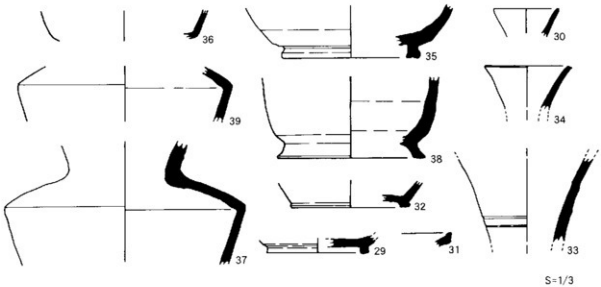
内底面に自然釉がみられる。25と同一個体と考えられる。

25　須恵器　坏　底部

24と同一個体であろう。外面の調整は粗雑である。

26　須恵器　坏　底部　高台径11.5cm

須恵器壺



29　須恵器　広口壺　高台径８cm

坏の高台との区別が難しいが、その直径が８cmと小さいことから、おそらく壺底部である。また底部内面の調整は粗く、自然釉が観察できることから、細頸壺や長頸壺でなく広口壺であると推定される。

30　須恵器　細頸壺　口縁　復元口径５cm

平瓶の口縁とも類似するが、小さな口縁であるため、おそらく長くて細頸の壺であろう。全体に非常によく調整されている。

31　須恵器　長頸壺　口縁端部　想定口径約18cm

確実に壺の口縁であると判断できるのはこの関-43のみである。

32　須恵器　細頸壺底部　高台径9.6cm

内底面は非常に丁寧に回転ヘラ削りされている。焼成は内外ともに良好で、35のような大きめの壺の底部とは大きな差異が見られる。高台は小さく偏平である。胎土は非常に密である。山-11の口縁が付くと考えられる。

33　須恵器　長頸壺　頸体部

器壁が厚く、外面にヘラ状工具によるものと思われる沈線が２本巡っている。外面は自然灰釉の緑釉が顕著に見られる。壺の胴部は肩の丸いタイプと考えられる。胎土はやや粗で黒い斑点（雲母か）が多い。

34　須恵器　細頸壺　口縁部　口径7.0cm

器壁は非常に薄く、黒っぽく硬質に焼かれており、丁寧にヨコナデされている。当初その小ささから平瓶の口縁部分かとも考えられたが、慎重に実測してみると、口縁の開きが大きく、おそらく頸状のものが付くものと想定される。また胎土と調整の具合から32の壺底部破片と同一個体と考えられる。

35　須恵器　広口壺　高台径11.0cm

高台が非常に大きく器壁が分厚いのが特徴。体部は横へ張り出すような膨らみがある。内面は自然釉が見られ、調整は不明。

36　須恵器　壺　体部

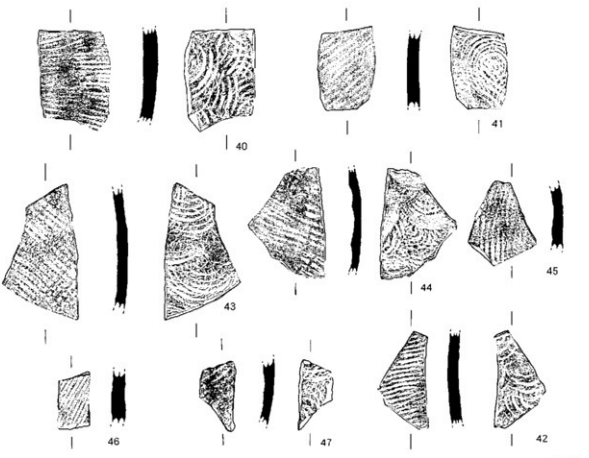
・見坏にも見えるが、外側のみに豊富に自然釉が観察される状況から、内側に自然釉のかからない形状の長頸壺などが想定される。また体部の立ち上りもやや丸味を帯びている。

37　須恵器　広口壺

体肩部の残存で、口縁部に繋がる頸部も残る。最大復元径は19cmである。また少し離れた地点の同じ包含層から検出された壺高台（38）とは直接的な接合面をもたないが、接合が可能であると考える。

38　須恵器　台付長頸壺

須恵器　甕



40　須恵器　甕　肩部

外面には筋状のタタキがあり、縦方向のタタキと見た場合にはおそらく肩部に該当するだろう。

41　須恵器　甕　体部

大型の甕の下体部と考えられ、外面には縦方向の粗いタタキがあり、内面には直径約5.6cm程の同心円の当て工具の痕跡が観察できる。

42　須恵器　甕　体部

外面には自然釉があり、縦方向のタタキが見られる。

43　須恵器　壺　体部

小さな方形の小窓状のタタキ。内面当て工具の同心円の直径は約4cm。

44　須恵器　壺　体部

外面筋状のタタキの単位は非常に小さく幅約2cmに4本程度か。内面当て工具は直径約5cm程度の同心円状のものか。

45　須恵器　壺　体部

外面には格子状のタタキ。内面に当て工具痕はない。

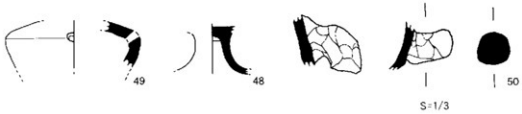
46　須恵器　壺　体部

外面は筋状のタタキ。内面当て工具痕はなし。

47　須恵器　壺　体部

43とほぼ同一個体と考えられる。

その他の須恵器



48　須恵器　高杯　脚

低脚系の高杯である。坏部底面は凹凸があるなど若干調整が曖昧なのに対して、脚部の調整は非常に丁寧。

49　須恵器　甕

体肩部のみの残存で、肩部の丸味は小さく偏平なのが特徴。またこの肩稜線部分に径推定約1cm程度の孔が外側上方から内側下方へ向かって1ヶ穿たれている。但しこの孔の穿ち方は粗雑で、孔を穿った串状の道具を抜き取った時に生じた粘土のバリが外面に残っている。

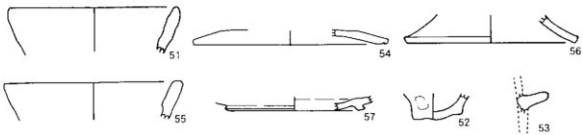
高台が付いていた甕かどうかはわからない。体部は非常に厚手で器面はザラザラしており、他の出土須恵器とはやや異質な感がある。通常で考えれば、今回出土した遺物の中で唯一最も古い年代が与えられそうではあるが、奈良時代以降に稀に存在する甕である可能性も高く、他地域の甕との比較検討が課題である。

50　須恵器　甕　体部の取手

調整の具合から上下の差をはっきりと確認できる。調整は粗く、同種のものは大型の甕などの取っ手にみられる。

灰黒色で厚手。内面は精緻なヨコナデ。外面はヘラケズリの後ナデ消し。

上師器



51　上師器　製塩土器　口縁　推定口径13.0cm

おそらくメガホン形の製塩土器の口縁であろう。全体が大きく摩耗している。

52　上師器　蛸壺　底部

製塩土器の可能性もある。外底面は凹凸が激しく、直立できたかどうかは不明。二次焼成も不明。外面の磨耗が内面よりも激しく、この土器が水中にあったことを示しているように考えられる。とすると製塩土器というよりも蛸壺であった可能性の方が大きい。

53　土師器　羽釜　鍔部

鍔部のみ残存。最大径18cm程度

54　土師器　蓋　直径15.1cm

外形は須恵器の蓋と類似している。口縁端部内側は溝状に彫り込まれている。

55　上師器　製塩土器　口径14.2cm

逆メガホン形。二次焼成をうけたような黒灰色。胎土は粗い。51と類似。

56　土師器　高杯　脚台部　底部径13.3cm程度

器種ははっきりしないが、おそらく高杯であろう。

57　土師器　杯　底部　高台径11.0cm

非常に硬質。高台を貼り付けた痕跡が明瞭。

実測できなかった上器（写真有）

58　須恵器　蓋　体部

非常に偏平な須恵器蓋で、奈良期の特徴がある。

59　須恵器　蓋　体部

非常に偏平で、口縁端部に段差のあるタイプ。奈良期。

60　須恵器　甕　体部

タタキメ。内面は同心円状の当て工具痕跡。

61　須恵器　長頸壺　下体部

灰黒色の大型の長頸壺の下体部片。外面は灰被り。

62　須恵器　長頸壺　頸部のみ

口縁部は欠損していて不明。

63　須恵器　甕　体部

64　須恵器　杯　口縁端部

高台のないタイプであろう。陶邑の杯Hタイプか。厚手で、口縁端部は重ね焼痕のように黒色帯が見られる。

65　須恵器　壺体部断片

内面一面に豊かな自然灰釉、外面は凹凸が激しくあり、ザラザラ。器種は不明。

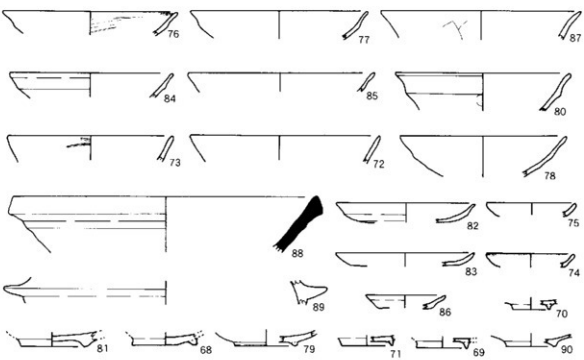
66　須恵器　蓋　体部

極めて偏平な蓋であろう。

67　須恵器　深鉢　口縁部小破片

逆メガホン形で、外底部に幾つかの孔がある深鉢の口縁部。

瓦器



S=1/3

68　瓦器　椀　高台部のみ　高台径5.0cm程度

69　瓦器　椀　高台部のみ　高台径5.0cm程度

70　瓦器　椀　高台部のみ　高台径5.0cm程度

71　瓦器　椀　高台部のみ　高台径5.0cm程度

72　瓦器　椀　口縁部および体部　口径14.0cm程度

73　瓦器　椀　口縁部および体部　口径13.0cm程度

74　瓦器　小皿　直径7.2cm　口縁内外に重ね焼痕。

75　瓦器　小皿　直径7.2cm　剥離激しく、74とは比較不能

76　瓦器　椀　口縁部および体部　復元口径14.0cm

高台部欠損　口縁に平行方向のヘラミガキあり。内面に重ね焼痕跡。尾上編年第Ⅳ-1期。

77　瓦器　椀　口縁部および体部　復元口径14.0cm

ヘラミガキは不明。　カーボン剥離。尾上編年第Ⅳ-1期ぐらい。

78　瓦器　椀　口縁部および体部　復元口径13.2cm

やや小型。全面カーボン残存。薄手。尾上編年第Ⅳ-1期ぐらい。

79　瓦器　椀　高台部のみ　高台径5.6cm

尾上編年第Ⅲ-3～Ⅳ-1期ぐらい。

80　瓦器　椀　口縁部および体部　復元口径14.0cm程度。

高台部欠損。カーボン剥落。ヘラミガキ不明。尾上編年第Ⅳ-1期。

81　瓦器　椀　高台部のみ　高台径5.6cm

尾上編年第Ⅲ-1～Ⅲ-3期ぐらいか。

82　瓦器　皿　口径11.0cm

薄手。カーボン剥落。ヘラミガキ不明。胎土は粗い。外面口縁端部が外反している。

83　瓦器　皿　口径11.0cm

82とは口径がほぼ等しいが、口縁部の形状や器壁の厚さがまったく異質。やや厚手。カーボン剥落。ヘラミガキ不明。口縁端部内湾。

第4章　まとめ

今回の調査での成果を箇条書にまとめておく。

①今回の調査で古代の包含層から検出された須恵器は、他地域の須恵器との比較から、第Ⅳ期 -2段階つまり平城宮Ⅲ（8世紀第3四半期）から第Ⅳ期 -3段階平城宮Ⅳ（8世紀第4四半期）のものと考えられる。同時に出土した土師器も同時期のものと考えられる。

②今回の調査では住宅開発の道路部分を広く調査したにも拘らず、建物や溝などの集落遺構は一切検出されなかった。このことと熊取町内の発掘調査では珍しく須恵器がまとまって検出されたことにより、調査地点のすぐ南側の溜池のある丘陵斜面付近に、須恵器を製作した窯跡が存在する可能性がある。

③逆に②に対して、須恵器の窯跡の場合は、ほぼ完形の失敗作品（未成品）など、比較的大型で断面の鋭利な破片が多く検出される傾向がある筈だが、今回検出された須恵器はいずれも使用された痕跡のような摩滅の比較的大きい実用的な製品の破片であるように観察される。

また今回の七山東遺跡99-1区で出土した土器は、須恵器破片293点に対し、土師器の破片も570点と非常に多く存在している。決してこの場所で生産されていたかもしれない須恵器ばかりが出土するわけではなく、生活道具を示す土師器も多く検出していることを明記しておく。

④調査地点一帯はほぼ四方を低丘陵に囲まれる非常に狭い平地となっており、奈良時代の局地的な遺跡としては、或面非常に興味深いもので、調査区の隣接地での今後の調査が期待される。

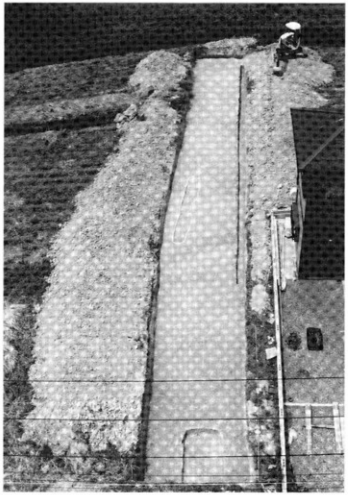
⑤熊取町内で奈良時代に限定される包含層が検出できた初例であり、熊取町での今後の発掘調査によい指標となった。ちなみにその土色は黄褐色で、須恵器が含まれていなければ、直下の地山と区別するのがなかなか困難であった。

⑥検出された須恵器と土師器はすべて奈良時代に限定されるものであり、その直後に続く時期の土器が一切検出されていない。またその後は熊取町内通有の瓦器を含む中世の包含層が豊かに存在している。このことは逆に七山東遺跡が奈良時代の新しく旺盛な律令制の下で開発され、律令国家の衰退とともに荒廃していったことを物語っているようである。中世になって私的な体制下に入るまで、この付近は荒廃したまま放置されていたのではないか。

⑦検出された奈良時代のものと考えられる土師器の中には、目立って粗製のものが多く含まれており、これらは製塩土器と考えられるものである。

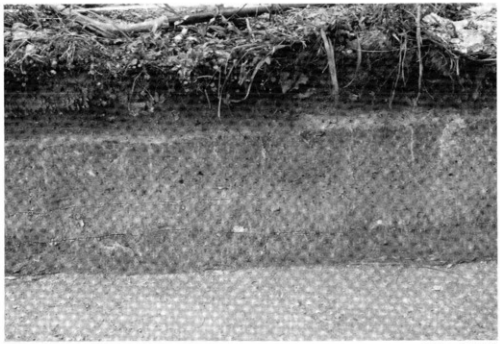
⑧中世の包含層から多数検出された瓦器の殆どは鎌倉時代後期の13世紀後半代をしめすものばかりである。従って中世期の調査地点付近には、人々が暮らす何らかの構造物等があったと考えられる。

⑨近世の遺物はまったく検出されていない。このことはまた少し奇異なことのようであるが、今回の調査地点付近は、江戸時代には完全に農地となり、人々の生活する屋敷などがある場所ではなかったということであろう。調査地点付近は平成に入った今日まで農地であり、付近に古くからの民家等が存在した形跡はない。

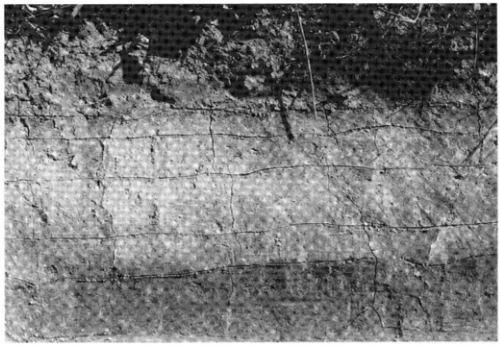


1 調査区全景

2 調査区全景

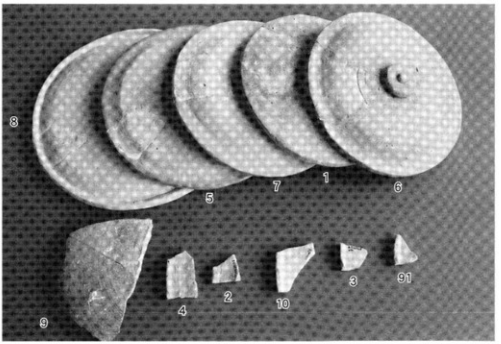


3　壁面（東壁）

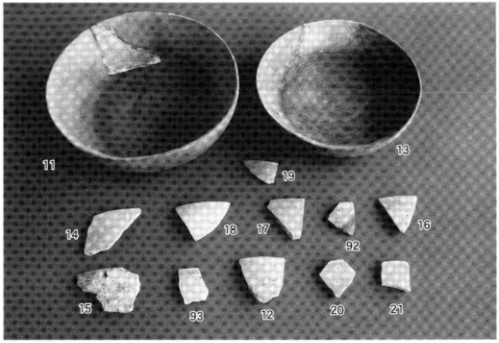


4　壁面（東壁）

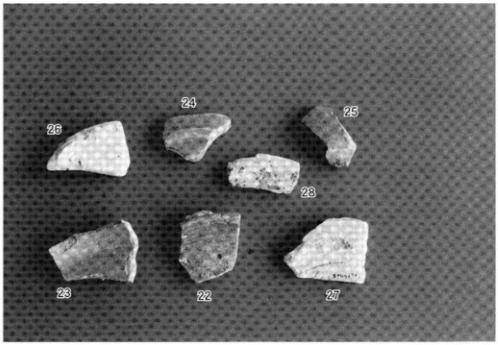
5　遺構土壙SK1



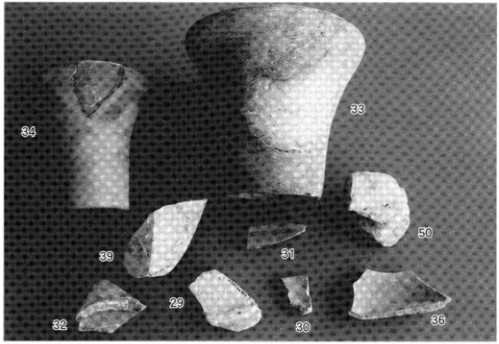
6　須恵器杯蓋



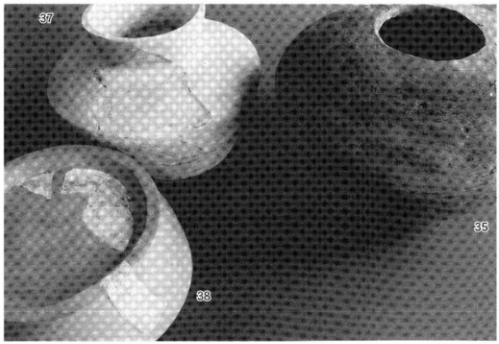
7　須恵器　杯



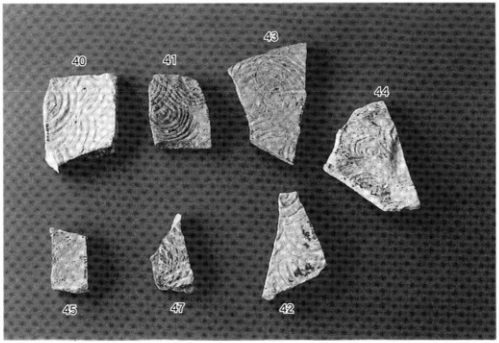
8　須恵器杯　底



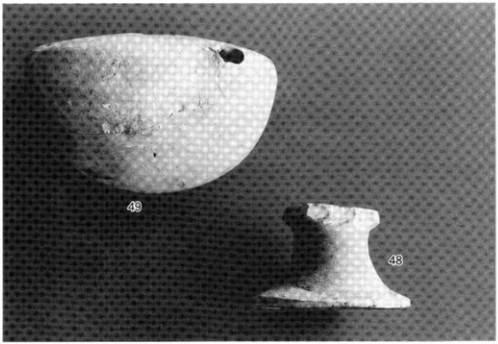
9　須恵器　壺



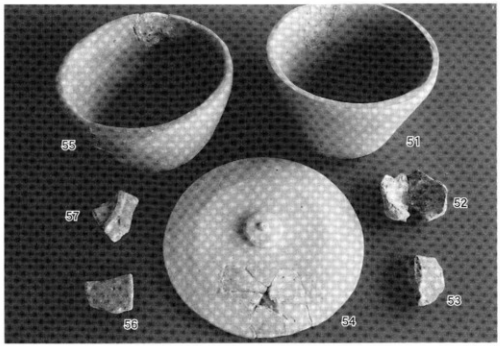
10　須恵器　壺



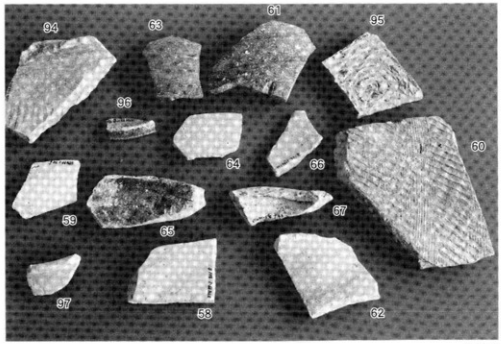
11　須恵器　甕



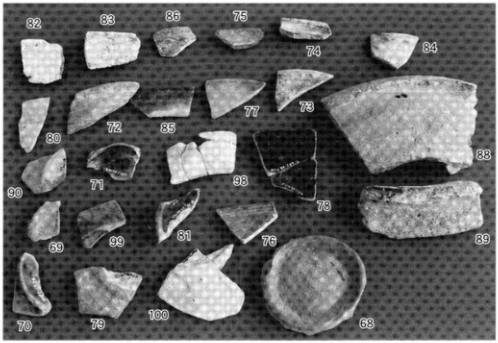
12　須恵器　瓮・高杯



13　土師器



14　須恵器


82
83
86
75
74
84
77
78
72
85
80
88
71
93
90
78
69
99
81
76
89
70
79
100
63

15　瓦器

報 告 書 抄 録

ふりがな	しちやまひがしいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書　　名	七山東遺跡発掘調査概要報告書
巻　　次	Ⅰ
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第35集
編 著 者 名	前川　淳
編 集 機 関	熊取町教育委員会
所　在　地	〒590－0495　大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号
発行年月日	西暦2000年3月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
七山東遺跡 99－1区	大阪府泉南郡 熊取町七山 570－6他6筆	27361	41	34° 23′ 34″	135° 21′ 55″	19990706 ～ 19990725	136	分譲住宅地造成

所収遺跡	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
七山東遺跡 99－1区	散布地	奈良～室町時代	土壙	古代土師器・須恵器・瓦器	奈良時代後半頃

熊取町埋蔵文化財調査報告第35集

七山東遺跡発掘調査概要報告書・I

発行日　平成12年3月

発行・編集　熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号

印刷　小笠原印刷（株）

大阪府泉佐野市上瓦屋646番地